

[特集] 治りにくい肺炎に 出会ったら

- [Chapter 1] 一般的な肺炎
治りにくい肺炎を見抜くために
- [Chapter 2] 感染性肺炎ではあるが治りにくい理由があった！
- [Chapter 3] 感染症と考えていたが実は感染性肺炎ではなかった！
- [Chapter 4] 気がつかずにいると危機的になりうる疾患

厚生労働省の web サイトで本邦の死亡統計が確認できる。2022 年の死因順位は 1 位悪性新生物 24.6%, 2 位心疾患 14.8%, 3 位老衰 11.4%, 4 位脳血管疾患 6.9%, 5 位肺炎 4.7% となっている。10 年前の 2012 年, 肺炎は 9.9%(第 3 位)であり, 統計上は肺炎による死亡割合は減っている。ただしこの統計には 2016 年から誤嚥性肺炎が別に登場しており, こちらは徐々に死亡割合を増やしている(2022 年第 6 位 3.6%)。誤嚥性肺炎を併せると肺炎はいまだに死因の上位にくる疾患であると言えよう。また以前は「老衰」と死亡診断書に書くことが憚られ「肺炎」と書いていたという話も聞くので, 大幅に肺炎が減ったとも言えないようである。

というわけで, 医師になってから一度も肺炎を診たことがない方はほとんどいないだろう。研修医のときに診ただけという方もいるだろうが, その後の医師人生において専門科でなくとも診療せざるをえないのが肺炎である。さらには少なからぬ落とし穴があるのも肺炎診療の事実である。細菌性肺炎と考えて抗菌薬を投与するなかで, なかなか治らず後に結核や肺がんであったということは, 想像するだに恐ろしいが, 頻繁に起こりうることでもある。

本特集では, Chapter 1 を一般的な肺炎の治療経過と治りにくい肺炎に出会ったときに疑うべき鑑別診断を臨床・画像から概説いただいた。Chapter 2 では感染性の肺炎ではあるものの一般的な抗菌薬治療で改善しないものを, 疾患それぞれの特性から解説していただいた。Chapter 3 では実は感染症ではなかった症例を扱った。呼吸器内科医以外にはなじみがない疾患もあるが, いずれも頻度の高い疾患であるのでぜひご一読いただきたい。Chapter 4 では最近のトピックである免疫チェックポイント阻害薬による免疫関連有害事象や膠原病関連間質性肺炎など危機的になりうる疾患を扱っている。なお, 診断につながる重要ポイントや注意すべき鑑別疾患については, 企画者の判断で太字で表記させていただいた。

肺炎は common diseases の一つであり, その死亡率の低下が証明するとおり, 抗菌薬の適切な使用により転帰が良好になることが多い疾患である。しかしながらその落とし穴は意外と大きく, また落とし穴に落ちていることに医師自身で気がつかないことが一番大きな問題かもしれない。治りにくい肺炎に出会ったら, 「はたしてこの抗菌薬で合っているのか?」という視点だけでなく, 「はたして細菌性肺炎で合っているのであろうか?」という疑問をもつことが非常に重要である。自戒を込めてであるが, その観点がないといつまでたっても落とし穴のなかにいることに気づけない。本特集が肺炎診療に迷ったときの道しるべとなることを願っている。

立石知也
(東京医科歯科大学 呼吸器内科)